

四角に、ときには三角を加えたり、時によっては丸を加えたり、そのあたりは世の中とのバランスを取って。基本は四角だということを教わっていたので、それをもとにデザインしました。基本は四角でありながら、ちょっと角が丸くなっていたり、断面が三角になっていたりと。最初はあまり評判が良くなかったんですが、何年もつけているうちに、だんだんと皆さんに愛されるようになりました。

12 “箸使い” と “F1 の操縦”

最終的には、本田さんのお宅に伺って決めてもらったんです。私は、自分の考えていたもので決まったものですから、舞い上がって、すぐ帰って商品につけようと思って失礼しようとしたら、「おい、ちょっと待て、それをF1につけろ」と。「商品につけるんじゃないんですか？」と聞いたら、「まずはF1だ」とおっしゃるんですね。

それでF1の監督、後に社長になる方なんですが、F1にこのマークつけてくれないかと言ったら、「ステテコを逆さまにしたようなマークを？」と言われまして。「そんなこと言ったって君、F1の表面は全部スポンサーのものなんだ。俺がいいって言っても、スポンサーが許さないよ」と。それでスポンサーに「つけさせて欲しい」とお願いしたら、「本田さんが言っておられるならつけようじゃないか」と受けてくれたんです。これでやっと肩の荷を降ろして、いずれは商品につけられるだろうと思っていたら、しばらくして本田さんが、「おい、テレビに映らんぞ」、と言って来られて。

テレビは、1番か2番を走っていないと映してもらえないんですね。それで監督に言ったら、監督もメカニックもレーサーも皆、テレビに映ろう、テレビに映ろう、になったんです。それでそうやってやっているうちに、だんだん前の方で走れるようになって。そのうちになんと優勝しちゃったんです。優勝し出すと連続して優勝するんですね。

なんと本田さんは、そういうことをするためにやったのかと思うくらい戦略的に。F1の優勝が続き、やっ

と世界中でこのマークが浸透したところで、「まあ、そろそろつけてもいいじゃないか」ということになったんです。それでこのマークが、販売車につけられるようになりました。

F1の話のついでにもう少しお話しますと、鈴木亜久里という有名なF1のレーサーがいました。もう引退されましたけども、その人がある対談でこんなことを言っているんです。「F1のハンドル操作というのは、箸使いのようなものなんだ」と。箸使いのような感じでやるとうまくいくんだと。本当かなというんで、私は自慢じゃないですが、箸使いはかなり下手だと思っ

ていますが、車の運転の方はちょっとしたものだと思っ

ていたものですから、ハンドルを握るみたいに箸使いをしたらいいのかなと思ったんです。

亜久里さんはもう1つ大事なことを言っています。お尻の穴の筋肉、肛門の筋肉を緩めろと。F1のコクピットというのは、狭いところですよ。身動きも取れないところです。本当に手だけで動かす。軽く手をあてて動かす。そのとき肛門の筋肉を緩める、もちろん緩みっぱなしじゃいけないんですが、鍛え鍛えて鍛え抜いて、乗ってるときは緩めるんだそうですね。

それに気がついて、僕は毎朝、緩めて、緩めてと書いて、箸を使う練習をしていました。最近うまくなったような気がするんですけども、どうぞ実験してみてください。(笑)。効き目があります。

13 “デザイン” は “性能” である

そんなこんなで、車のデザインは80年代の半ば、ホンダのデザインというのがたいへん世界的に評価が高まりました。そんなときに本田さんがおいでになって、「おいおい、この車、性能がいいだろう」と言われるのです。ここはデザイン室です。「デザイン室で性能の話？」と、良くわからなかったんですが、「DOHCやVTECがついてますから」と、そんな返事をしましたら、「うーん、これは性能がいいに違いない」とさらに言われる。いろいろ聞いてみると、「カッコいいからね」ということなんです。ほめてもらってるんで